

金ヶ崎あらくれ

快隱

越前さんは自分の過去の遍歴を一通り話した後、俺の眼を睨みこよう言った。「俺も命ひろでもろた。荒くれて行き場無くし大阪城公園でホームレスをやり命枯れようとしてた。その時夜回りに来たこの事務所の者に助けてもろた。これも生きていく方法や、誰かてやり直ししたらええねん。俺は君の力になりたいと思って言うてんのや」俺はその言葉を聞いて腹を決めた。「よし、俺はこの人に頼もう、この人の言うとうり従ってみよう、生きていく方法を教えて貰おう」二年前の行き暮れた末の俺の決断だった。俺は生活保護を申請しようとしていた。しかし俺は迷っていた。それは最後の手段、まだ早くないかと。その為に訪ねた金ヶ崎にあるボランティアのNPO事務所で俺は(越前)さんに出会った。59、まだ何とか出来るのではないか、何とかしなければいけないのではないか。そう思って迷っていた。俺は19で東京の大学へ行った。小説家に成りたいと思っていた。それが無理ならせめて新聞記者に。新聞記者くらいなら成れる。たかをくくっていた。愚かしい限りである。大学を卒業したのは7年後。あまりにも遅い春だった。小説家になる夢はいとも簡単に潰えた。大学には将来作家になりたいと願う学生がごろごろいた。そんな学生の渦の中で俺はコンプレックスを感じ、大学にも興味を失い、後は酒と風俗にギャンブル。転落の道をまっしぐらに駆け落ちて行った。言い訳をする気は毛頭ない。ほんと墮落そのものの道。敬愛する坂口安吾大先生にはお叱りを受けるであろう欲望に耽る蛇のような、汚れ切った道。作家坂口安吾の言う「墮落」の意味を理解できぬ阿呆の転落の道だった。これではアカンと何度思ったことだろう。しかし一年もしない間に新聞記者の夢さえ捨てていた。「あんな「ブル新」俺の方から捨ててやらあ」そんな感じだった。小説家そして新聞記者、その二つを捨ててしまうと後は将来成りたい職業は無かった。全然なかった。大学生活の7年間はモラトリアムを最大限伸ばしたかっただけの放蕩だった。俺は卒業する二ヶ月前になつて初めて就職課を訪ね、そして何の間違いか一ヶ月後には就職を決めた。大手電機メーカーの子会社だった。仕事は営業、面接の時その会社の常務に「君は五年で課長になつてもらおう」と言われた。工場長には反対され「君はアウトローじゃないのか」と言われた。俺は「親にはすまないと思ってます」と答え不覚にも涙をこぼし少々しゃくりあげてしまった。常務が「まあまあ若い時はそれくらいの方が良い」と守ってくれてた。でも、その会社一年足らずで簡単に辞めた。俺を守ってくれた常務には大変申し訳ないが所詮俺はアウトローの方が性に合っていたのだ。結局東京での生活を切上げ大阪に戻って来た俺は肉

体労働で自分を鍛え治そうと或石材店での就職を決めた。仕事は石碑の建立という肉体労働と石碑契約営業の両方。早朝から石碑の建立をし、営業は深夜にわたる結構ハードな仕事だったがわりと楽しんでやれた。何事も経験というのが俺の主義。知識からではなく経験から学ぼうとその仕事に飛び込んだ。二年程はやった。しかし一つ所で仕事をするのは俺の性に合わない。製版会社の営業、求人広告の営業、居酒屋の店員、何でもやってやれる自信もあれば、一方でどれ一つとしてやりたい仕事ではなかった。どの仕事もある程度はこなせるがどの仕事も中途半端であった。俺はそもそも錢儲けの仕事には情熱を傾けることのできぬ気性。すぐに仕事はつまらなく思えてしまった。しかし大きな落とし穴に俺は気づかぬまま転落していた。ギャンブル。競馬の一点買いにはまり俺は給料の大半を注ぎ込み、サラ金に迄手を出してしまった。挙句の末出奔。親兄弟に尻拭いをさせ、多少の逡巡の後金ヶ崎へと辿りついた。生活は日雇いの土方でしのいだ。見よう見まね、戸惑いながらも体力と気力だけはあった。三年の後俺は金ヶ崎から一旦市内の或町に居を移した。女が出来、仕事も変えた。女とは俺が50になる位まで暮らした。子供は作らなかった。欲しいとは思わなかった。女とは一生をともにする気であったが、結果別れた。挙句再度金ヶ崎に出戻った。もう心は老いかけていたし、体力の衰えも痛感した。そして9年の日にちが経ち俺は襤褸の古ぼけた人形同然で越前さんの前に座っていた。「君はヘルパーの仕事に興味はないか。無料で学べて資格が取れる。俺はボランティアで介護をやってるが、ええもんやで」と越前さんが言った。俺はまだ仕事はしたいと思っていた。俺は職業訓練で資格を取りヘルパーの仕事に着いた。やってみると案外難しくもなく、楽しい。これから先の希望にはなる気がした。「自身の老いを見つめながら介護の仕事が続けて行きたい。」越前さんに時たま会うとその時の決心を俺は何度も確める。

講評

アウトローな性質、一つところに留まれない放浪の性質。まさに安吾の世界だと思えますよ。安吾も依存症を持っていましたし。生活保護と介護の仕事進める元ホームレスの越前さんの、「これも生きていく方法や、誰かてやり直したらええねん」という言葉が優しいですね。片意地張っていた肩の力が抜けるようです。小説ではないけれど、こうして文学作品を書いて、若いときの夢を、じつは密かに控えめだけれど実現させている気がします。(選者・星野)